文化功労賞

久野原の御田保存会

久野原の御田は、有田川上流域に伝承されてきた御田行事の一つであり、その起源は室町時代に遡ると考えられている。地区の氏神である岩倉神社境内でかつては毎年開催されていたが、昭和４６年から隔年の2月１１日に奉納されてきた。

各地に残る御田行事の多くは、田植えの所作までで終わるものが多いが、有田川上流域に伝承されてきた御田は春田起こしから秋の収穫、もみ供えまでの全過程を演じる全国的にも貴重な民俗芸能である。

久野原の御田の特徴は、御田に先立って行われるお渡りに、御田の出演者だけではなく、乳児を抱いた母親等が含まれ、小児の村入り行事も兼ねていること、主役である舅と聟（むこ）は台詞を語らずに、周りの座謡衆の掛け合いに応じて演技をすること等があげられ、他とは趣の異なる御田行事となっている。

この伝統ある民俗芸能を保存継承することを目的として、昭和４６年２月に久野原の御田保存会が結成された。昭和５６年７月には保存会の活動と文化財としての価値が認められて、久野原の御田は和歌山県無形民俗文化財に指定された。以後、今日に至るまで後進の育成や詞章の調査、近畿・東海・北陸ブロック民俗芸能大会や和歌山県民俗芸能大会へ出演するなど、民俗芸能の保存と公開に尽力されてきた。また、御田行事の公開を通して、観光振興にも寄与してきた。平成３１年以降は御田行事の開催は休止となっているものの、近年には映像記録の作成や謡囃子の音声データの記録保存に取り組むなど保存会の活動は継続し、令和５年２月１１日岩倉神社境内において、謡囃子の奉納を予定している。

４００年以上にわたり継承されてきた歴史ある民俗文化財の保存継承の活動は、本町における文化振興に大きく尽力されており、その功績は多大であります。

文化功労賞

法蔵寺大師山奉賛会

有田川町井口の内崎山に建つ法蔵寺は、弘法大師を本尊とする 寺院で、「井口大師」とも呼ばれている。境内には明恵上人が修業した紀州八所遺跡のひとつである崎山遺跡がある。また、四国八十八か所が勧請されて霊場となっている他、観音・不動・金毘羅・地蔵信仰など多様な信仰の場所でもあり、田殿地区における民間信仰の中心をなしてきた。

法蔵寺は、安政２年（１８５５）に有田川を挟んだ対岸に位置する浄教寺が取得して以後、歴代住職によって整備され、浄教寺の奥の院としての性格を持つようになった。

法蔵寺大師山奉賛会によって行われる「二十日の晩」は、毎年８月２０日の夜に行われ、弘法大師の縁日の前夜祭に打ち上げられる奉納花火である。文久元年（１８６１）頃から続く伝統行事であり、村人から納められた初穂で火薬を購入し、住職が自ら火薬を調合して手作り花火を打ち上げたのが始まりとされ、夏の終わりの風物詩として長年にわたり地域住民に親しまれてきた。

しかし、近年は人口減少や新型コロナウイルスの影響による行事中断も重なり、開催資金が確保できず行事の継続が困難となっているが、伝統を絶やさずに後世に引き継ごうと新たにクラウドファンディングを活用して寄付を募り、ホームページやＳＮＳで発信するなど、時代に即した文化財保護活動にも取り組まれている。

このように法蔵寺大師山奉賛会は、歴史ある伝統行事の保存継承に尽力されており、本町における文化振興に果たした功績は多大であります。